

「小学部」研究グループ

1 研究テーマ

『小学部段階における情報活用能力を育成する指導場面の検討』

2 研究テーマについて（設定の理由）

今年度の小学部は、16名の児童が在籍している。知的障害単一（12名）と重複障害（4名）の2つの教育課程に基づき、個々に応じた学習が組み立てられている。学級編成や各教科等の学習グループは、生活年齢を意識したものとされており、各学級・グループの中で児童それぞれの実態に応じた指導の工夫がなされている。1～6年という広い幅の中で、児童自身から学年を意識した発言が聞かれたり、学年をまたいだ交流では下級生に優しく接したりと、学年の区別があるからこそ自分の立場や役割の自覚が感じられる。児童らは、実態や生活年齢の差のある中で、小学部という集団で日々学習を積み重ねている。

特別支援学校要領・学習指導要領解説総則編（以下、学習指導要領総則）によると、“情報活用能力”は学習の基盤となる資質・能力（教科横断的な視点に立った資質・能力）の一つであり、自立活動とともに、小学部児童の教科等の指導を支える力であり、私たちが意識して育まなければならない資質・能力である。その一方で、教科等と同じように“時間における指導”ではない点や情報活用能力の内容の広義さからか、意識が向きにくい点ではあった。これまで「情報活用能力」と聞くと、普通小学校のように、一人一台用意されたiPad等のICT機器の活用のイメージも強く、小学部の児童の実態にそぐわないように見え、ICT機器の活用へのハードルの高さにもつながっていた。そのような状態を受けて、私たちが今一度、小学部の児童に対する“情報活用能力”とは、どういったものなのか、改めて捉え直す必要があると考えた。そうすることで、各教科等の学びがよりよくなり、子どもたち一人一人の生きる力の育成につなげていきたい。

そのために、「小学部段階における情報活用能力とは何か」「その指導の際に大切にしたいことは何か」を明らかにしたいと考えた。先にも示した通り、“情報活用能力”とは、学習の基盤となる資質・能力であり、学校での様々な指導場面で育まれるべきものである。このことを確認の上、児童の具体的姿をもとに文献等を読み解くこと、そして実際の指導場面の検討を通して、その読み解いたことを実践をもって確かなものにしていくことが必要だと考えた。その上で、次年度の授業づくりにつなげていきたい。

実際に、小学部の教員からは、特別支援学校、特に小学部においての“情報”という言葉の捉えが難しく、“情報を使う”ということとICT機器を使うということの区別がつきにくく混乱しやすいとの意見が挙がった。学部研究を通して、文献の読み解きや事例検討を重ねる中で、今現在ははっきりとしていない“情報”という言葉の意味をより明確に捉える場となるとよいと考える。また、“情報活用能力”の意味はとても広く、小学部としてどれが大切なことなのか、しぼる必要性がないか、との意見も挙が

った。この点についても、文献の読み解きの後、ICT活用チェックシート等を参考に、小学部段階で重要視したい内容について、明確化するよう努めることとしたい。

3 研究目標

(1) 本校小学部の児童に必要な情報活用能力はどのようなものを捉え、それを育成するにはどのような方法があるか、また指導において大切なことは何かを検討する。

(2) 学部研究(文献から読み解く、事例検討等)を通して、情報活用能力に関する考えを深め、小学部の教員としての指導力を向上する。

4 研究目標及び方法

(1) 情報活用能力を捉える(自身の担当の児童を通して「学習指導要領総則」「教育の情報化に関する手引」「ICT活用チェックシート」の文献を読み、情報活用能力を具体的に捉える)

(2) 事例検討(低学年、高学年各1名、事例対象児童を挙げて、情報活用能力の育成の視点から授業場面を切り取り、観察や指導方法の検討・改善を行う。)

(3) まとめ(事例検討で出た意見をもとに、「小学部段階における情報活用能力とは」「指導の際に大切にしたいこと」を“小学部段階の情報活用能力”として抽象的に捉える)

5 研究計画

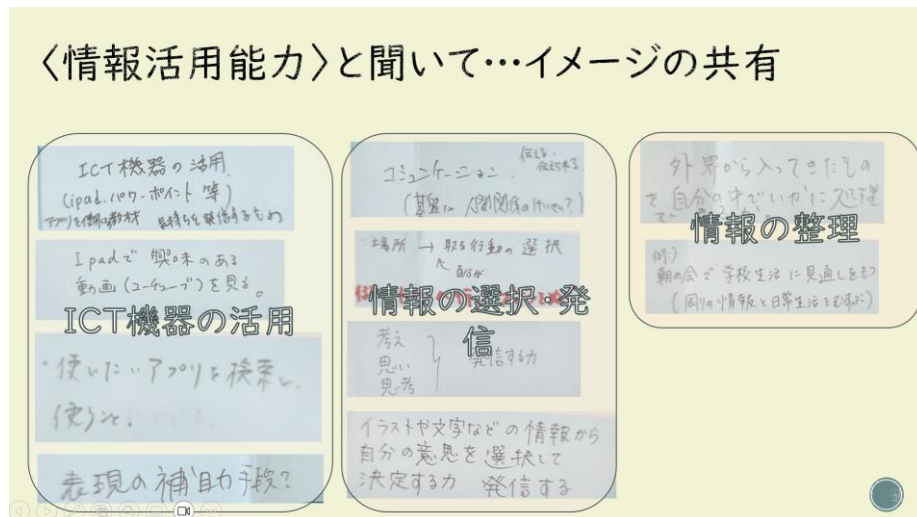
5月9日	第1回全体研－今年度の研究について(提案)
5月13日	学部研(1)－小学部研究の提案、情報活用能力に関するイメージの共有
5月27日	学部研(2)－情報活用能力を捉える(「学習指導要領総則」より)
6月7日	学部研(3)－情報活用能力を捉える(「教育の情報化に関する手引」より)
7月23日	学部研(4)－情報活用能力を捉える(「ICT活用チェックシート」より) 事例対象児童と指導場面の選定
8月23日	第2回全体研－中間報告会
8月28日	学部研(5)－事例対象児童の情報活用能力の目標の設定、指導の検討
9月27日	学部研(6)－事例検討①
11月19日	学部研(7)－事例検討②
12月25日	学部研(8)－事例検討③ 学部まとめ①「小学部段階における情報活用能力とは」 「指導の際に大切にしたいこと」
1月16日	学部研(9)－学部まとめ②

6 研究実践

(1) 情報活用能力を捉える

① 学習指導要領総則より

まず初めに、“情報活用能力”と聞いて、どのような力なのか、小学部教員の率直なイメージを共有した。そこには、意見の多い順番に、iPad等のアプリを活用する力として「ICT機器の活用」、場所に応じた行動をとったり、思いを発信したりする力として「情報の選択や発信」、学校生活への見通しをもつ力等の「情報の整理」が挙げられた。



そのイメージの上で、学習指導要領総則 P. 207 に示されている「情報活用能力」について読み進めた。

イ 情報活用能力

情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協議し、新たな価値の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成が重要となる。また、情報技術は人々の生活にますます身近なものとなっていくと考えられるが、そうした情報技術を手段として学習や日常生活に活用できるようにしていくことも重要となる。

特別支援学校学習指導要領総則 p. 207

ここに示されている通り、上記の下線部「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え」「情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して」「問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていく」は、情報活用能力を育む目的、必要性和読み取れる。私たちがもっていた“情報活用能力”のイメージを、この3点に照らし合わせると、4点の気づきがうまれた。

- (a) 近年の「ICT 機器の活用」の流れと「情報活用能力」の区別をつける必要性があること。
- (b) 五感を使って感じたり、気付いたりすることが情報を得る基礎ではないかということ。
- (c) 得た情報を生活の中で使うことが大事であること。
- (d) 得た情報を伝える、発信する場があることが大切であること。

自分たちの現時点でのイメージを振り返り、情報活用能力を育む視点として、これらのことを前提として検討を進める必要性がわかった。

次に、情報活用能力をより具体的に捉えるために、P. 208 に進んだ。

情報活用能力をより具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。

特別支援学校学習指導要領 総則 p. 208

ここに示されている、下線部 9 つの具体的な資質・能力について、担当児童にとって、どんな姿かを考え、共有した。

グループ共有「情報活用能力」を捉える()		学年 G ・ 高学年 G)	学部研②R6.5.27
① 学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得る	① 情報の取捨選択(情報の取捨) ② 情報の取捨(情報の取捨) ③ 情報の取捨(情報の取捨)	① 情報の取捨(情報の取捨) ② 情報の取捨(情報の取捨) ③ 情報の取捨(情報の取捨)	付箋の内容を共有して、気付いたこと (なんて付箋が多い?少ない?、小学部で大切な情報手段の整理して?情報手段で?等)
② 情報を整理・比較する	② 情報の整理・比較(情報の整理・比較) ③ 情報の整理・比較(情報の整理・比較)	② 情報の整理・比較(情報の整理・比較) ③ 情報の整理・比較(情報の整理・比較)	② 整理・比較(情報の整理・比較) ③ 整理・比較(情報の整理・比較)
③ 得られた情報を分かりやすく発信・伝達する	③ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達) ④ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達)	③ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達) ④ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達)	③ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達) ④ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達)
④ 必要に応じて保存・共有したり	④ 情報の保存・共有(情報の保存・共有) ⑤ 情報の保存・共有(情報の保存・共有)	④ 情報の保存・共有(情報の保存・共有) ⑤ 情報の保存・共有(情報の保存・共有)	④ 情報の保存・共有(情報の保存・共有) ⑤ 情報の保存・共有(情報の保存・共有)
⑤ このような学習活動(①～④)を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得	⑤ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作) ⑥ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作)	⑤ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作) ⑥ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作)	⑤ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作) ⑥ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作)
⑥ プログラミング的思考に関する資質・能力等	⑥ プログラミング的思考(プログラミング的思考) ⑦ プログラミング的思考(プログラミング的思考)	⑥ プログラミング的思考(プログラミング的思考) ⑦ プログラミング的思考(プログラミング的思考)	⑥ プログラミング的思考(プログラミング的思考) ⑦ プログラミング的思考(プログラミング的思考)
⑦ 情報モラルに関する資質・能力等	⑦ 情報モラル(情報モラル) ⑧ 情報モラル(情報モラル)	⑦ 情報モラル(情報モラル) ⑧ 情報モラル(情報モラル)	⑦ 情報モラル(情報モラル) ⑧ 情報モラル(情報モラル)
⑧ 情報セキュリティに関する資質・能力等	⑧ 情報セキュリティ(情報セキュリティ) ⑨ 情報セキュリティ(情報セキュリティ)	⑧ 情報セキュリティ(情報セキュリティ) ⑨ 情報セキュリティ(情報セキュリティ)	⑧ 情報セキュリティ(情報セキュリティ) ⑨ 情報セキュリティ(情報セキュリティ)
⑨ 統計等に関する資質・能力等	⑨ 統計等(統計等) ⑩ 統計等(統計等)	⑨ 統計等(統計等) ⑩ 統計等(統計等)	⑨ 統計等(統計等) ⑩ 統計等(統計等)

情報の取捨(情報の取捨) ② 情報の取捨(情報の取捨) ③ 情報の取捨(情報の取捨)

情報の整理・比較(情報の整理・比較) ③ 情報の整理・比較(情報の整理・比較)

情報の発信・伝達(情報の発信・伝達) ④ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達)

情報の保存・共有(情報の保存・共有) ⑤ 情報の保存・共有(情報の保存・共有)

情報の基本的な操作(情報の基本的な操作) ⑥ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作)

プログラミング的思考(プログラミング的思考) ⑦ プログラミング的思考(プログラミング的思考)

情報モラル(情報モラル) ⑧ 情報モラル(情報モラル)

情報セキュリティ(情報セキュリティ) ⑨ 情報セキュリティ(情報セキュリティ)

統計等(統計等) ⑩ 統計等(統計等)

情報の取捨(情報の取捨) ② 情報の取捨(情報の取捨) ③ 情報の取捨(情報の取捨)

情報の整理・比較(情報の整理・比較) ③ 情報の整理・比較(情報の整理・比較)

情報の発信・伝達(情報の発信・伝達) ④ 情報の発信・伝達(情報の発信・伝達)

情報の保存・共有(情報の保存・共有) ⑤ 情報の保存・共有(情報の保存・共有)

情報の基本的な操作(情報の基本的な操作) ⑥ 情報の基本的な操作(情報の基本的な操作)

プログラミング的思考(プログラミング的思考) ⑦ プログラミング的思考(プログラミング的思考)

情報モラル(情報モラル) ⑧ 情報モラル(情報モラル)

情報セキュリティ(情報セキュリティ) ⑨ 情報セキュリティ(情報セキュリティ)

統計等(統計等) ⑩ 統計等(統計等)

この作業を通しての気付きとしては、以下の 3 点が挙がった。

- (e) 小学部における「情報」「情報手段」は広義であるということ。
- (f) 低学年からは「外界のものを取り入れる、五感から試す」、高学年からは「言葉、言葉にのる思いをくみ取る、伝えたいという思いをもつ」等がキーワードとなること。
- (g) 外界に関心を向け、情報を取り入れたい、知りたい、伝えたいといった思いを育てることが大切ではないか、ということ。

担当の児童を思い浮かべながら、“情報活用能力”に関する文章を読む中で、情報活用能力を育む視点について、より具体的に、検討を進める必要性を感じた。

これまで、総則の P. 207, 208 を読み進めてわかった(a)～(g)のことを基に、総則から捉えることのまとめとして、“情報活用能力を構成する資質・能力”を読んだ。その際に、「教育の情報化に関する手引」を活用して、より具体的に3つの柱を捉えようと試みた。

〈知〉情報と情報手段を活用した問題の発見・解決等の方法や、情報化の進展が社会の中で果たす役割や影響、情報に関する法・制度やマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報の科学的な理解に裏打ちされた形で理解し、情報と情報技術を適切に活用するために必要な技能を身に付けていること。

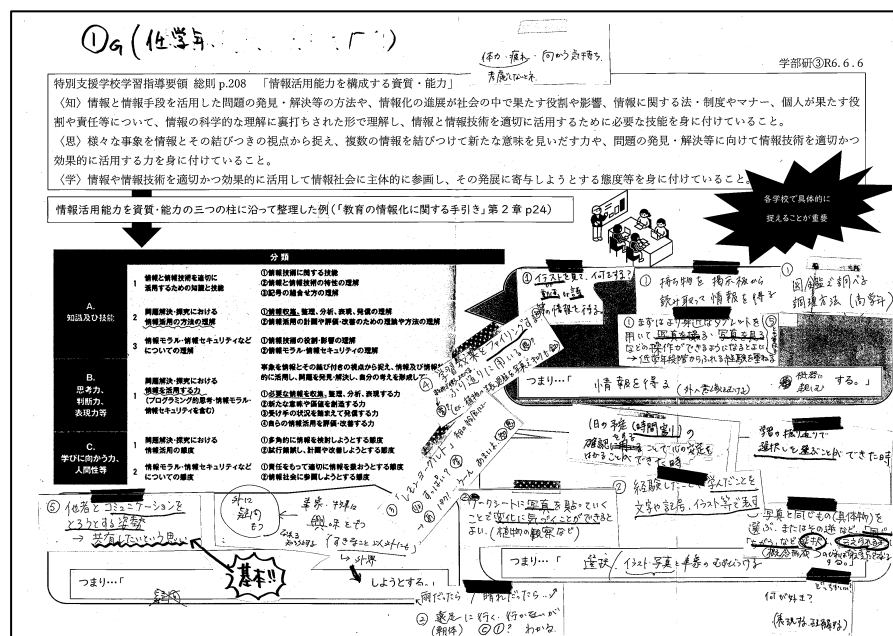
〈思〉様々な事象を情報とその結びつきの視点から捉え、複数の情報を結びつけて新たな意味を見いだす力や、問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること。

〈学〉情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して情報社会に主体的に参画し、その発展に寄与しようとする態度等を身に付けていること。

特別支援学校学習指導要領 総則 p. 208

②教育の情報化に関する手引より

上記の“情報活用能力を構成する資質・能力”を読み進めるにあたり、「教育の情報化に関する手引」P. 23-24 の表と合わせて読み進めた。そこから、これまで自分たちが考えてきた児童の姿はどこに当てはまるのか、それらを自分たちの言葉で端的に表現するとどうなるか、という作業を行った。



これをもって、学習指導要領総則に示されている“情報活用能力を構成する資質・能力”を目の前の児童を想像した上で、どのような力なのか、それを自分の言葉でアウトプットすることで、読み解くこととした。出された言葉が以下の通

りである。

低学年

〈知〉情報を得る、外へ意識を向ける（気付く）、機器に親しむ

〈思〉情報を選択する、イラスト・写真と事象を結び付ける

〈学〉事象・物事に興味をもとうとする、外へ疑問をもとうとする、気付きを共有しようとする

高学年

〈知〉教師（人）を含め外の環境から情報を得る

〈思〉自分にとって必要な情報を「…ということはこうかな？」と考えるために使う

〈学〉教師（人）を含め外の様子を意識して「こうかな？」と思おうとする。

これらのことを、仮説として立て、これを事例検討の際の指針として活用することとした。

③ICT活用チェックシートより

①②の学部研究での成果をもとに、山梨県教育委員会作成の「ICT活用チェックシート」を用いて、小学部における情報活用能力の育成において重要視したいことを、広義にわたる中から、可視化をした。

これまで検討されてきたことから、私たちが、小学部段階でより重要視したいと考えたのは、知識・技能では「(2)問題解決・探究における情報活用の方法の理解①情報収集／②整理・分析・表現／③発信」、思考力・判断力・表現力では「(1)問題解決・探究における情報を活用する力②新たな意味や価値を創造する力」、学びに向かう力・人間性では「(1)問題解決・探究における情報を活用する力①多角的に情報を検討しようとする態度」であった。広義な情報活用能力の中から、これらに焦点の当たった事例検討を目指すこととした。

(2) 事例検討

低学年グループと高学年グループに分かれて検討を行った。これまで文献を通して、情報活用能力を捉えてきたことを活かして、事例対象児童の2つの指導場面を選定した。その指導場面を撮影した動画を使って、小グループでの検討を重ねた。

指導場面を2つとしたのは、情報活用能力が“教科等横断的な視点に立った資質・能力”であり、自立活動の上にくる学習の基盤となる力として位置づけられているものであるからである。複数の場面を検証していくことで、その事例対象児童の各教科等の“学びを支える大きな力の一つ”として情報活用能力についての検討がしやすくなると考えた。

① 低学年グループ

(a) 事例対象児童について

1年生 N.M

- ・情報収集の点で、低学年の中で一番の困難さをもっているのではないかな。
(授業中の離席＝することがわからない、近距離での観察＝提示されているものへの関わり方等)
- ・本人が、状況を捉えて、理解し、活動に参加するため支援や学習に向かおうとする環境づくりが必要。それは、どの授業場面にも通ずるのではないかな。
- ・外（こちらの示すもの）への関心をもってほしい、見ようとしてほしい。

(b) 指導場面について

国語・算数／体育

(c) 事例検討のまとめ（別添資料①：事例検討の過程を示すワークシート）

指導場面の検討〈1年 N.M〉まとめ	
場面① 国語・算数の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって)	「同じものを合わせる」という学習内容が伝わっているか。 ・運動感覚をたよりにした手段(入れる、はめる)に着目してしまっている。入れたら終わりになって見分け課題になっていない。やってほしいことが伝わっていない。 ・自分の顔写真を選ぶ様子が見られたから課題を設定してみたが、そもそも児童の実態に合っていなかったかもしれない。 →運動感覚の手立てがやることを伝える手段にならず、邪魔になってしまった。まずは、児童に合った課題の見直しを行う。
場面② 体育の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって)	よく前(集団の方)を見ている。→情報(みんなのいる方向が自分が歩く方向)を得ようとしている。 ・道を間違えた時に、教師が壁となり、集団のいる方へ視線が向くと、方向を直す→言葉がけ(「Nさん、こっちだよ」)の支援のみというより、物理的支援も必要か。 ・特別活動(この授業とは違う場面)でも集団について歩いていく様子も見受けられた。本児にとって目印となる人がいれば、みんなについて歩いていくことができる。
N.Mさんにとっての情報活用能力とは…〈参考:総則 P.207,208〉	○情報を得ようとする(見ようとする、聞こうとする、触ろうとする、やろうとする…等) ・見ようとする…周りの人の動きをよく見る様子がある。 ・聞こうとする…本児の言葉(内言語)が増えていくと、聞く意味が見いだされ、より聞こうとするようになるのでは。 ・やろうとする…日常生活の流れ、授業の流れ等、わかった上で「次はこれかな」「あれだろうな」と思ってやろうとする様子が見られるとよい。
研究で検討したことを通して、情報活用能力を育むために、N.Mさんに必要な手立ては?指導の際に大切にしたい視点は?	・繰り返し取り組むこと ・言葉をわかりやすく使うこと(言語環境の整備) ・“今できること”を活かした新しい学習の設定(ex.体育の実践での、歩く方向を変えていったこと等) ・下を向いて自己刺激(発声、手遊び)に没頭しやすいので、物理的に視線をあげられるような支援、あげたくなるような支援をして、世界を広げて情報を得られるように。

○本児にとっての情報活用能力とは

- ・情報を得ようとする力(見よう、聞こう、触ろう、やろうとすること)

○本児にとって必要な手立て、指導において大切にしたいこと

- ・繰り返し取り組むことで、“やってほしいこと(授業の流れ等)”を伝えること
- ・本児にとってわかりやすい言葉を使うこと、また言葉数を精選すること
- ・下を向いて発声や手遊び(自己刺激)をしていることが多いので、物理的に視界を広げる手立て(教材の提示位置、書見台の活用等)
- ・“今できること”をベースにした授業づくり、活動設定をすること

② 高学年グループ

(a) 事例対象児童について

6年 Y.S

- ・ある程度、言葉が使えるようになってきているところである。（2語で話そうとする）
- ・最近“周囲の影響を受けてそれが表に出る”ことが多く、周囲からの情報収集が活発になっていると考えられる。

(b) 指導場面について

国語／日常生活の指導（朝の係活動場面）

(c) 事例検討のまとめ（別添資料②：事例検討の過程を示すワークシート）

指導場面の検討〈6年 Y.S〉まとめ ⁴¹	
場面① 日常生活の指導の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって) ⁴²	
・“天気調べ”…調べたことを活かせる場を教師が意識して作りたい。本児も「ここに書いてる」と言うように、指さして伝えられるので、新聞から情報を得ている。 ⁴³	
・“ニュース調べ”…写真をそれなりに選んでいる。当てずっぽうではない。地震の記事等、印象に残ったものを選んでいる。その際に「漢字教えて」と教師に尋ねる姿もあり、“知りたいから聞く”という姿勢が感じられる。(漢字に興味があるなら、iPadでの検索や漢字辞典等の活用も考えられるか。手段の広が ⁴⁴ り。) ⁴³	
場面② 国語の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって) ⁴²	
・日常生活とつながることが大事だと思った。 ⁴³	
・関心のあるもの、実感のあるものを扱う。 ⁴³	
Y.Sさんにとっての情報活用能力とは〈参考:総則 P.207,208〉 ⁴⁴	
○情報を自分から得にいくこと ⁴⁵	
・こういう姿勢を広げる、その手段を広げることが大切になる。 ⁴⁶	
○得た情報を使おうとすること ⁴⁷	
研究で検討したことを通して、情報活用能力を育むために、N.Mさんに必要な手立ては?指導の際に大切にしたい視点は? ⁴⁸	
・教師が意識的に“ちょっと困りポイント”をつくる。(いつもと違う解決法を提供する。Ex.先に出た漢字の調べ方等) ⁴⁹	
・本児が本当に気になること、関心のあること、困ったことを題材にする。 ⁴²	

○本児にとっての情報活用能力とは

- ・情報を自分から得にいく力

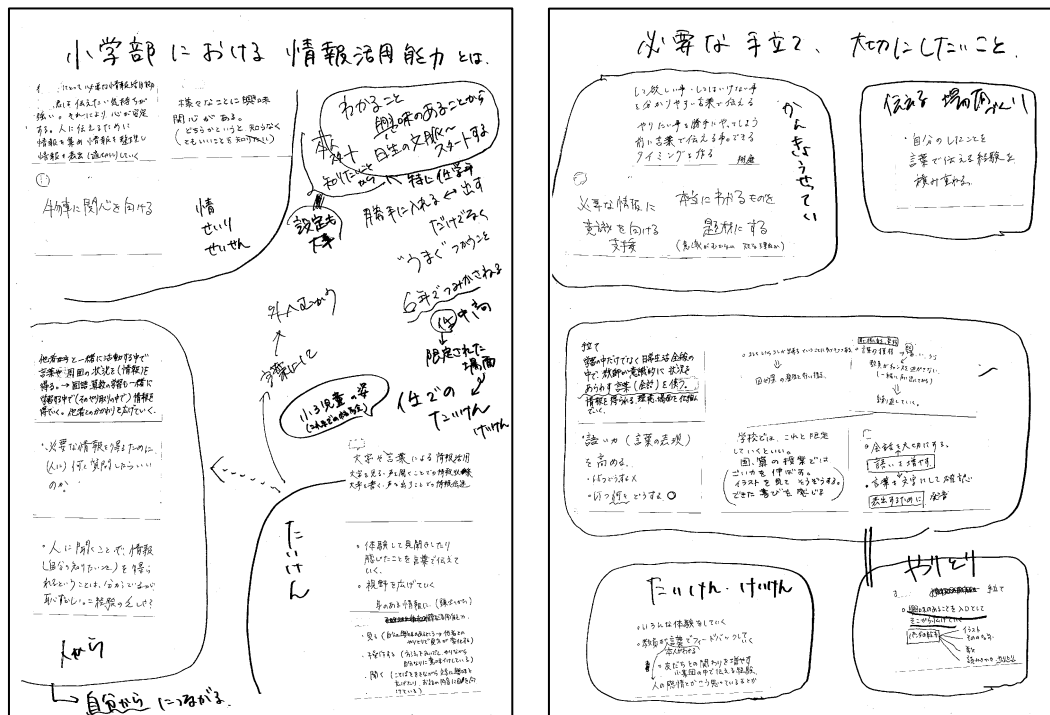
○本児にとって必要な手立て、指導において大切にしたいこと

- ・“天気調べ（新聞から天気予報を見つける）”をしているが、調べるだけで終わらずに、得た情報（天気）に意味付けをしていくこと
- ・知らない漢字と出会うと「漢字教えて」と言ったり、気になっている先生が出勤しているかどうか聞いたり、本人の自発的な行動が見られる。もっている力をいかして、手段（ex. 漢字なら iPad や辞書での検索方法を教える等）を広げていくこと
- ・“いつもと違う”状況を意図的につくり、情報活用能力の育成にいかすこと

7 研究のまとめと今後の課題

事例検討を通して、事例対象児童2名の情報活用能力について検討を重ねてきた。そこで考えてきたことを通して、もう一度、“担当の児童にとっての情報活用能力とは”“その指導のために大切にしたいこととは”の2点を考えた。その際に、記入する付箋の色を、低学年（青）、高学年（ピンク）、重複生（緑）で分けるようにした。それ

らの意見を KJ 法を用いて整理を行い、これまで個人で検討してきたことを“小学部段階の児童”という大きな視点で捉え直すことで、まとめとしたい。



(1) 小学部段階における情報活用能力とは

- ・情報を整理する力
- ・人（友達を含む）から情報を得る力
- ・体験をもとに情報を得る力

整理をしていく中で、低学年と高学年の違いが顕著に出た。高学年になると、情報を得る対象となる人が徐々に友達まで広がりを見せることもあるようであった。一方で、低学年においては教師から情報を得る場面が多く、学校において身近な人である教師との関係性の大切さや教師がどう意図的かつ適切に情報を扱うかという重要性がわかる。それに加え、低学年や重複生については、体験をすることの重要性が集中している。一方で、高学年はそのような体験的な活動を積み重ねてきた低学年時代を経ているからこそ、対人や周囲の状況からの情報収集をすることができるようになるのではと考えられる。

(2) 指導において大切にしたいこととは

- ・環境設定をすること（情報を得たり、発信したりしやすい環境を意図的に設定する）
- ・得た情報を伝える場面をつくること
- ・言葉の力をつけること（語彙を増やす等）
- ・体験や経験を大切にすること（それを伴った身のある言葉をもつこと）
- ・興味のあることを入口に、やりとりを広げていくこと（人との関わりの基盤づくり）

整理をしていく中で、児童にとってわかること、興味のあることや日常生活の文脈から情報活用能力を育む指導を始めることが大切であるということを改めて感じたという意見が挙がった。一方で、高学年の事例のような“天気調べ”等の設定された場面も情報収集の手段を広げる際に重要な役割があるという意見も出た。本人の“知りたい”を大切にしつつ、教師の意図した場面の設定も行っていきたい。

また、重複生（肢体不自由を併せもつ）について重点的に話されたのが、一見困難なく情報を得たり発信したりしているように見えるが、その情報に体験や経験が伴っていないと感じられることが多く、得るべき情報の精選が困難であることがうかがえる。そのため、生活の中での経験の積み上げや実感を伴った活動を通して、実のある情報にしていく必要性があることが挙げられた。

さいごに、研究として「情報活用能力」に焦点を当ててきたが、はじめに感じていたような「ICT 機器を使う」「どんなことをすればよいのかわからない」等のイメージとは変わり、これまで自分たちが当たり前に大切にしてきたこと（環境整備、言葉、体験等）がまとめとして挙がった。それは、私たちが「情報活用能力」という言葉を、児童らを通して読み解き、考えてきたからであると思う。今後、「情報活用能力」のみならず、教育に関する様々な用語が新しく出てくる。その時に、それらの意味や出てきた背景などの自分たちで考えることを大切にしたい。このことは、時代が目まぐるしく変わっていく中で、適切な指導をする際に、必要となってくる教師の資質ともいえるだろう。

（３） 今後の課題

整理をしていく中で、情報活用能力の育成に関して、“小学部”という大きな括りのみならず、そこから更に“低学年”“中学年”“高学年”の違いを意識する必要性も明らかになった。今年度の学部研究では、“小学部における情報活用能力”という大きなまとめとしたが、来年度の研究での授業実践においては、今回明らかになったことをもとに、児童らの生活年齢、もっている経験を意識した情報の扱い（精選、提示、発信の場の設定）を明確にすることが必要となるだろう。情報活用能力を育む側の教師には、児童の学年によって、積み上げられる情報活用能力も変わってくるということを念頭に置くことが求められる。それぞれの児童が６年間を通して、必要な情報を出し入れして使う力をつけていくという観点をもって、その年にどのような目標を立てるのか、そのためにどんな活動や場を設定していくかを考えて、授業実践を重ねていきたい。児童一人ひとりがどのように情報を捉え、活用するのかという視点を持ち、日々の授業づくりや児童との関わり方を教師が意識し、実践することが大切になってくるであろう。

また、今年度の研究のまとめとしては、小学部段階における情報活用能力として、ICT 機器に関することは多く挙がってこなかった。しかし、ICT 機器の利

活用について、小学部段階での活用の方法については、課題が残ることとなった。中、高等部での「学習をより効果的にするための ICT 機器の利活用」に向けて、小学部でどのような力を基礎として培っておくべきか、ICT 機器が「情報手段」として活用できるためには、どのような支援・指導をしていくべきか検討をしていく必要がある。

さいごに、来年度においては、「情報活用能力」と各教科等で育まれる資質・能力との関係性を確認の上、「授業づくり」をする必要があると考える。授業時間はあくまで教科等の時間の指導であり、混同しないように意識をもつことが求められる。「情報活用能力」は、教科等横断的な視点に立った資質・能力であることを念頭に置き、授業づくりの過程での検討が必要であろう。

〈参考文献〉

文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」P. 204-209

文部科学省（2019）「教育の情報化に関する手引」P. 23, 24

山梨県教育委員会（2024）ICT 活用チェックシート

別添資料① 〈N.Mさんの検討過程ワークシート〉

指導場面の検討 〈N.M 国語算数〉

〈身に付けさせたい情報活用能力〉		〈指導場面〉 ☆指導方法
・ものや人から、自分のやること(情報)を得る。(本児にとっての情報＝自分の直接的に関わること) ・〈楽しい経験の上で、流れがわかった上で〉知っていること・ものと、もの・言葉を結びつける。 ・「やりたい」「たのしかった」を共有しようとする。(相手に向かって発信、その良さを感じる)		写真の対応(2学期～の新しい教材) ・友達や教師の名前を聞きながら、写真カードをマッチングさせる。 ☆2枚(二人)の白黒写真を提示して、名前を言いながら、1枚(片方)のカラー写真を渡す。
8/28(①指導場面の設定、その際の留意点等)		教材や教師の関わりから、課題の内容(自分のすべきこと)がわかること。
8/28(①指導場面の設定、その際の留意点等)	9/27(②指導場面動画を見て)	11/19(③動画を見て、今回の検討(記録))
〈情報活用能力に関わって〉 ・授業の構成において、流れ(教材1つやったら片付けの場所へ片付け→褒める)を繰り返す形にすることで、環境設定をもって、流れを情報として伝えている。 〈教科に関わって〉 ・日常生活の指導(朝の会、係活動)とのつながりを意識した学習内容の設定。 〈評価の基となる行動〉 ・「わからない」と思うと、教材を投げる様子あり。→本児が教材に向き合っているか(やることが伝わっているか)の指標になるか。 〈児童の実態〉 ・斜視がある ・興味関心の強いもの(水筒等)はみようと する。 →教材を繰り返し取り組む必要がある。	〈児童の様子から〉 ・自分、担任、授業者の顔を概ね正しく置けている。 ・片方にカラー写真が置かれていれば、空いている方へ置く様子あり。 ・左側に置くことが多い、傾向がある。 ・2学期からイヤイヤ期なのか、座っている時間が減った。 ・教材のおわりがわかってきているように思う。 ・生活における言葉(「トイレ」等)はわかって行動する。 〈情報活用能力に関わって〉 ・国語算数の時間になったら、自分で席につく。 ・「同じ顔写真を置く」ということはわかっているのでは。 ・写真を置く、と「褒めて」といわんばかりに、抱っこをせがむ。(終わりがわかっているということか) ・集中力をもつ課題の量の調整が必要。 〈教科に関わって〉 ・自分の顔はわかっているのではないかと思う。正しく置ける。 →出席調べでも自分の顔写真だけを手に取る様子がある。 改善点 ・下地は黒いマグネットボード(見やすくすること) ・2枚の写真の区別をつけて、やること(見分けてほしい)がわかるように、マグネットボードは2つ使用する。	〈児童の様子から〉 ・教材は、机の上ではなく、目線の先に提示した。 →書見台を活用するか。(他教科では使っている) ・「自分とその他」という感覚が強い。はじめに「自分じゃない方」を提示すると、どうか。 →まだやったことがない。 ・2枚のマグネットシートに分けて、やること(見分けてほしい)をわかりやすくしてみたが、どうか。 →一つ一つを見ており、見本合わせみたいになっているかも。 〈日常生活場面から〉 ・人の動きには反応がよく、目で追う傾向がある。(例:友達が離席すると、着席を促すように聞けることがある。友達がiPadを観ていると傍に来る。) ・友達の顔を覗き込むような動きが出てきた。 ・給食の下膳(同じ皿を重ねて片付ける)が上手になってきたように思う。 →得た情報(方法??)を活かす場面があると言えるか……? 次回への改善点 ・提示位置の工夫(パッと見たときに両方が見えるように工夫する。) ・写真に合わせて置くより、かごに入れる方がやるのがわかりやすいか。 もう一方の指導場面(体育)との共通点 ・声かけをシンプルに(教師の言葉数) ・名前を呼んでから、やることを伝える。 ・音声言語+身振りを大切に ・繰り返し取り組んで流れを作ること(授業の構成の工夫が大切)

指導場面の検討〈1年 N.M 体育〉

〈身に付けさせたい情報活用能力〉 ・ものや人から、自分のやること(情報)を得る。(本見にとっての情報=自分の直接的に関わること) ・(楽しい経験の上で、流れがわかった上で)知っていること・もの、もの・言葉を結びつける。 ・「やりたい」「たのしかった」を共有しようとする。(相手に向かって発信、その良さを感じる)	〈指導場面〉 ☆指導方法 <u>集団での歩行</u> 集団を意識しながら校内を歩く、戻ったら自ら着席する。 ☆みんなのいる方向を伝える	みんながいる方、言葉がけ、で自分の行くべき方向がわかること。
8/28 ①指導場面の設定、その際の留意点等) 〈情報活用能力に関わって〉 ・授業の構成において、流れ(体操→集団での歩行→メインの活動→片付け(全撤去)→リラクスタイム→振り返り)を繰り返す形にすることで、環境設定をもって、流れを情報として伝えている。 ・集団の動き(情報)に気付かせる(獲得)手立て →言葉がけ「集合ー!」 〈評価の基となる行動〉 ・ 〈教科の特性〉 ・ものがあって、場の設定、やることがわかりやすい。 〈児童の実態〉 ・集団歩行については、抱っこから始まった。	9/27 ②指導場面動画を見て) 〈児童の様子から〉 「今日もここを歩くんだな」と思っていそう。→流れの理解 - 教室を通り過ぎても、教師の声掛けて振り向いている 〈情報活用能力に関わって〉 - 曲がり角で、皆のいる方へ行くようになった。 - 手を繋ぐなくても、教室移動もついてくるようになった。 - 皆が止まったら止まる、進んだら進むようになってきている。 →みんなと一緒に動くんだという集団の動きに気付いている?? - 一個の活動が終わったら座ることも、できつつある。 〈教科に関わって〉 1学期は事務室止まりであった。体力がついてきた。 <u>改善点</u> ・「集まれー!」で集まる等、本見にとってやることわかる“合図”が必要か。 ・集団歩行は、反対周りを取り入れてみることで、本見が集団についてくということがわかっているか、がわかるのでは。	11/19 ③動画を見て、今回の検討(記録) 〈児童の様子から〉 ・広いところ(玄関)へ出ると、情報(進むべき方向である集団)を見失いやすい。 ・「歩く」こと自体には見通しをもっているし、自信をもって楽しそうに歩いている。 ・分かれ道はどうか、進むべき方向(集団)へ進めるか。 →自分で動く前に声をかけられたり、手を引かれたりしている状態。「歩く」時の教師の立ち位置を整理して、改善していく。 ・声かけて戻ってこれている。1学期は、教師が壁になるよう物理的な支援をしていた。 ・CTを頼りに歩いている気がする。それた友達についていっていない。 〈他教科では…〉 ・朝の体育での外周では、手をつないでいる。この様子を受けて、支援方法を考え直す。外周ではグラウンドよりも歩く道がわかりやすいので、この体育で培ってきた力が生かせそう。 〈何故ここまでできるようになったのか…?〉 ・1学期から継続してやってきたことで、わかってきたのではないかな。 ・授業の構成が同じ(主となる活動が単元ごと変わる)だからか。 <u>次回への改善点</u> ・声かけする人を、CTにしぼる。 ・教師の立ち位置の工夫 ・本児の誘導を減らすため、STは後ろにつく(CTへの注目も促せる) <u>もう一方の指導場面(国語算数)との共通点</u> 国語・算数 参照

別添資料② 〈Y.S さんの検討過程ワークシート〉

指導場面の検討〈6年 Y.S 日常生活の指導、朝〉

〈身に付けさせたい情報活用能力〉 ・情報を得る(キーとなるのは「言葉」?) ・得た情報を使う(知った言葉を使う。「この場面ではこうする」と知ったにもやってみる) ・得た情報を使うよさに気付く(知った言葉を使ってみる、知った「この場面ではこうする」としてみる → 得手が反動してくれた、みたいなよさに気付く)	〈指導場面〉 係の仕事(天気予報係、今日のニュース) 新聞の天気予報欄から当日の天気と翌日の天気を調べ、ボードに書く。屋外への活動予定と絡めることも期待できるか。(例: 明日の校外学習いけるかな?) また、梅雨や台風、雪など季節と絡めることも期待できるか。	新聞から、一日の天気等に関する情報を得て、日常生活と結び付ける。
8/28(①指導場面の設定、その際の留意点等) ・新聞がない時に、タブレットの活用も考えられる。 → 情報を得る手段の広がり ・天気予報の情報から、「○○だから、寒いね」「○○だからできるね/できないね」と、得た情報から考える ・言葉や状況とつなぐ	9/27(②指導場面動画を見て) ・新聞記事の選択では、1面の写真を撮っていたが、最近はある程度バラバラめくって写真を選んでいる様子が見られる。 → 情報を選ぶ、探すという活動をしていると言えるか。 ・天気調べでは、新聞のように情報を得るために使える物や手段がある、ということにふれていることになるか。この力が広がれば、「○○について知りたいから図書室に行く」というようなことにつながる。 ・自身が天気を調べたことで何か分かる、というような体験ができれば、得た情報を活用すること及び情報を活用した実感を得ることにつながるのでは。 → インターネットからの情報収集は、小学校でも苦労したことがある。新聞はある程度情報がコンパクトにまとまっていて、良い題材かも。 改善点 教員が天気に関連する話題を避さないようにして、本見が得た情報を活用できる場面を作る。(例: 朝の体育「今日はグラウンドで朝の体育ができそうですか?」) 発表する機会があれば、得た情報を発信する体験になるか?	11/19(③動画を見て、今回の検討(記録)) ・新聞記事の選択では、適当ではなく、ある程度、関心があるものを選んでるように見える。 ・調べたこと(天気予報調べ)を使う、得た情報を使う、ということをするために、朝の体育は外でできるか、中でやるか、というのを朝の会で紹介している。 ・本人的には、ルーティンとしてやっている、という感じではあるが、何か必要があって本見に調べたことを聞いたり、本見にみんなに対して発表させたり等、少しずつ調べることへの意味づけをしていくとよい。 次回への改善点 ・天気を調べる、ということへの意味づけをしていく。 もう一方の指導場面(国語)との共通点 得た情報を使う場面の設定の重要性。

指導場面の検討〈6年 Y.S 国語〉

〈身に付けさせたい情報活用能力〉 ・情報を得る(キーとなるのは「言葉」?) ・得た情報を使う(知った言葉を使う。「この場面ではこうする」と知ったにもやってみる) ・得た情報を使うよさに気付く(知った言葉を使ってみる、知った「この場面ではこうする」としてみる → 得手が反動してくれた、みたいなよさに気付く)	〈指導場面〉 なにが書いてあるかな(説明文、物語文) 問いと、それに対する答えがある、という状況に慣れる。(目的意識をもって読む姿勢を育てたい) 簡単な説明文を読むことにつなげていく。	文章から必要な情報を読み取る。
8/28(①指導場面の設定、その際の留意点等) ・文章から、情報を読み取る ・教員 A と教員 B の二人の教員についての問題(「○○先生の好きな食べ物はなんですか」等)が書かれたシートを提示し、さらに見える位置にその二人の教員をタイトルとした文章が書かれた紙を提示する。 ・簡単なストーリー、物語から因果関係にふれるのもよいかもしれない。	9/27(②指導場面動画を見て) ・教員 A に関する問題を答える際には、「教員 A の話」と書かれた紙を自ら取り、教員 B に関する問題を答える際には、「教員 B の話」と書かれた紙を自らとった。 → 自身に必要な情報を選んで情報を得ようとしている(得ている)、ということをしていると言えるか。 改善点 今は、2枚の紙のそれぞれ別のことが書かれており、これらから選んでいるが、一枚の紙に2つの情報が載っている形になると、文の読み取り方(=情報の得方)をさらに学べるのでは。 ・国語科は、文から情報を得る力を育てたり、目的意識をもって情報を得ようとする姿勢を育てたりするのに適した教科といえるのかもしれない。(教科等横断する中での国語科の役割…??)	11/19(③動画を見て、今回の検討(記録)) ・はじめに、A 先生のことを書いてあり、その次に B 先生のことを書いてある文を読んだ。「A 先生の好きな食べ物は?」「B 先生の好きな食べ物は?」いずれも正しく答えることができた。「前半に A 先生のことを、後半に B 先生のことを書いてある」ということがわかっていて、書いてある食べ物をとりあえず言ってみたのか…という理解をしているのかははっきりとわからないが、ある程度のアタリはついているよう。 ・まどめの際に、前半部・後半部を囲って「□せんせい」と書く、正しく先生の名前を入れている。 ・本文中は「B 先生の苦手な食べ物はありますか。」とあり、「苦手な食べ物は?」と聞かれて、食べ物を探していた本見にはなかなか難しそう。やりとりの中で、「ありません」という言葉にいきつき、なんとなく「わかったような、わからないような…」といった感じ。 → このような「わかったような、わからないような…」ようなものをまた別の場面で使う(=「～はありません」という言葉を求面でも使う)機会があると、得た情報を使う、ということになる。これは「学び」の大事なポイントだろう。国語的には、言葉を新たに使えるようになり、言葉の意味をより確実に捉えたりすることにつながる。 次回への改善点 ・「～はありません」等の今回の学習の中で「わかったような、わからないような」表現を、別の場面でも活用する。 もう一方の指導場面(日生)との共通点 日生参照